講師　：　内田律男
元島根県教育委員会文化課

「古代の米子と石川年足」を聴いて

聴講日　：　R 3.11.2
むきばんだやよい塾第22期

軒丸瓦

上淀廃寺は、同時代に創建された出雲安来の教昊寺と同じ文様の瓦が発見されていたため、発掘前から注目されていました。出雲国風土記に登場する教昊寺や、それ以外の10ヶ所の新造院は山陰地方の古代寺院と言えます。古代寺院の屋根には軒丸瓦があり、先端部の瓦当に文様が刻まれていますが、それらは列島独自のものではありません。出雲国分寺の瓦は新羅系で、新羅の人でさえ識別できないほど精巧な仕上がりになっています。山陰地方は新羅系の瓦が多く、教昊寺の瓦も同様と考えられていますが、別の考え方もあります。

軒丸瓦は、ハスの花を上からみて中央に種があり、周辺に花びらの図案が一般的です。蓮華文の瓦は、瓦当全体に対する中央のレンジ(蓮子)部分の比率が古いものほど大きく、新しいものは小さくて、蓮子の数も少なくなり、最後は5個くらいになってしまいます。百済は仏教の影響を受けて質素でシンプルな文様ですが、新羅は複弁といって二枚セットになった花びらで、周辺には唐草文様で囲ってあり、華麗でにぎやかな文様になっています。統一新羅時代のものは特に顕著です。高句麗の瓦はハスの蕾の状態か、もしくはハスの実のどちらかを図案化して周りに配置しています。北の騎馬民族に対抗する高句麗は、畑作地帯のとても強い国で、統一新羅以前は勇猛な民族の国でした。後の高麗とか渤海の瓦は高句麗の瓦と似ており、強国だった高句麗に肖ろうのとの意識が垣間見えます。

このような視点で上淀廃寺や教昊寺の瓦を見ると、掘りはきつくシャープで、ハスの種はつま楊枝で刺したように深く筋が通っていて、高句麗の瓦に似ています。両者は良く似ていますが、教昊寺が13枚の花弁であるのに対して上淀廃寺は12枚だったり、圏線も教昊寺が一本に対して、上淀廃寺は二重だったりします。両者は殆ど同時代ですが、円に対して奇数の花弁を割り付けるのは難しく、レンジ部分も教昊寺の方が大きいことから、教昊寺の方が僅かに古い段階と考えています。

上淀廃寺と教昊寺

出雲国風土記には“〇〇郡の〇〇郷に新造院があり、〇〇の父(或いは祖父)が建てた”と書かれ、多くは祖父の時代に建てられています。出雲国風土記が書かれた733年から一世代、或いは二世代前の時代にこれらの寺院が建てられていることが分かります。

教昊寺は、五重塔が一棟だけで、他の新造院は三重塔であったり、厳堂であったりです。当時の寺院は一棟のみで、僧が一人から五人くらいで、或いは僧がいないところもあります。時代につれて建物や人員が増え国分寺などの七堂伽藍が揃うのはずっと後のことであり、後から増えた建物には新しい瓦が使われています。風土記の時代には寺院としてまだ途上の段階でした。

上淀廃寺からは「癸未(西暦683年)」と書かれた瓦が出土しています。出雲国風土記の新造院も、風土記が書かれて年(733年)から二代遡ると、だいたい683年に符合してきます。後に741年の国分寺の詔が出され、国分寺は僧20人、国分尼寺は尼僧10人と規定されますが、それでも多いとは言えません。七堂伽藍を備えた立派な国立の寺院でさえそうなのだから、塔が一棟だけのような前段階であれば、僧の数も風土記の記載が頷けます。

上淀廃寺には壁画がありますが、教昊寺の場合は塼仏で壁が構成されていたようです。塼とは建築材料の一つで、煉瓦、タイルなどに類するものです。型に粘土を入れて成形し、そのまま乾燥させたものと、焼いたものとがあり、建物の壁面、床などに用いられました。浮彫りなどの装飾が施された画像塼が出現し、仏像を浮き彫りしたものを塼仏といいます。塼仏が出土している遺跡は多くありませんが、教昊寺の周辺から二点発見されていて、塔の内面か外側かに何百何千の塼仏で覆われていたと想像されます。

教昊寺や新造院を建てた豪族や郡司には日置氏が多く、山間部の大原郡や飯石郡の郡司の中にもいます。出雲国は出雲臣の強いところですが、日置氏も方々で郡司をしたり寺を建てたりしています。神戸郡には日置郷もあり、大化改新以前は国造をしたこともあるのではないでしょうか。因幡国にも気多郡日置郷があります。日置氏のルーツは新撰姓氏録に高句麗の出身もいるとあることから、教昊寺や上淀廃寺の瓦が高句麗系と考えられる傍証と言えます。教昊寺系には屋根の両側に載る鴟尾に鱗が描かれているのも共通していますが、これも高句麗の鴟尾と

共通しています。

出雲国風土記の意宇郡の教昊寺の記事に“教昊僧の造りし所なり。散位大初位下上腹首押猪の祖父なり”と書かれています。役人として最も下位の大初位下を退いた上腹首押猪の祖父が、教昊という名の僧で教昊寺を建てたことが分かります。“**教昊**”とは庶民の名前ではなく、僧の名前です。日本では名前に使われない昊の字ですが、韓国では今も使われているようで、教昊という名の僧は高句麗からの渡来の僧ではなかったかと思います。他の新造院は豪族が建てているのに対して、教昊寺は僧が建てていて、寺名が与えられているのは僧が建立しているのが理由かも知れません。

石川年足

石川年足が、出雲国司の長官として赴任しているのは天平7年～11年(735～739)の間です。四十代半ば、従五位下というかなり高位での赴任です。善政をしたので褒美をもらっていますが、その内容は定かではありません。“出雲では詔が出される前から年足が指導して国分寺を建て始めていて、それが善政とされた”と説く人もいます。帰京してからはトントン拍子に出世して正三位まで昇進しています。今で言えば広域行政官と言われるような国司を監督する役目や、紫微中台の次官、大宰府の長官や中納言、神社を統括する神祇伯もやっています。

年足の曽祖父は蘇我倉山田石川麻呂の兄弟ですが、乙巳の変では蝦夷と敵対する天智天皇側に味方したので、重要ポストに残ることができました。石川麻呂は濡れ衣を着せられ自害してしまいますが、その後冤罪が晴れて彼の子孫は復権し、年足も出自の良さで出世しています。一方、大化改新の立役者である中臣鎌足の子孫である藤原氏が、その後の時代で権力を掌握し、鎌足のひ孫である仲麻呂は政を牛耳っていきます。

柴微中台は、光明子が聖武天皇譲位後に皇后宮式を改組した組織で、その長官(令)に就いた仲麻呂は、次官(弼)に年足を抜擢します。二人は758年に太政官を乾政官と改め、柴微中台を坤宮官と変える官号改易を行っています。中国式に合わせようとした試みでしたが、大きな反発に会います。光明子の後ろ盾を失い、年足が亡くなると仲麻呂の求心力がなくなり、恵美押勝と改名して乱を起しますが、鎮圧されてしまいます。結局、仲麻呂は失脚してしまうのですが、一時期律令国家を供にリードしてきた二人でした。

国分寺の詔が出され、国分寺を造るのはそれぞれの国の国司ですが、財源の一部は郡司にも負わせています。大和やその近郊は創建していますが、大事業を地方は簡単に進められません。その状況に律令政府は、天平19年に年足ら3人を国分寺検定に発遣しています。建立に協力した郡司には末代まで郡司の職を任命することを約束するなどして、彼らの協力を促してまわっています。年足が出雲国国司であったときには、たとえ塔だけだったりしても、教昊寺やその他の新造院は既に建っていたはずで、仏教に篤かった年足はそれらを見ていて、携わった郡司などとも旧知の関係だったでしょう。上淀廃寺にも来ていて、屋根瓦も見ていたに違いありません。

天平勝宝8年(756)に聖武天皇の一周忌斎会に使用した幡などの道具が、出雲国を含む26ヶ国に与えられていますが、隠岐はその中に含まれていません。年足などを派遣して建立を促しても、隠岐では経済的な理由などで詔に従えず国分寺は建てられていなかったようです。軒丸瓦の編年から見ても、隠岐国分寺の軒丸瓦は瓦当の厚みが厚く756年以降に作られたことが分かります。建立が遅れた隠岐国分寺ですが、教昊寺の瓦の文様を採用されたのは、国分寺検定の際に年足の推薦があったからではないでしょうか。

晩田山31号墳

上淀廃寺の北側600mに晩田古墳群があり、その丘陵の端に晩田山31号墳があります。二段の外護列石を有する方墳で、7世紀代でもずっと新しい最後の姿の終末期古墳と呼ばれています。切石を使った横穴式石室は壊されていますが、一番奥の石室は壁を刳り抜いて入り口にしていて、その扉石には仏像の後にある光背が彫刻されています。追葬の可能性もあり、出土した須恵器の年代は大化改新前後かそれを降ると思われますが、光背が彫刻された扉石もその頃で、須恵器も仏具と推定されています。仏教と深く関わりがあった被葬者は、上淀廃寺の創建者ではないかと考えられます。

教昊寺の周辺にはこのような終末期古墳はありません。教昊寺の創建者が僧であれば火葬されている可能性が高く、火葬骨を埋葬した火葬墓は小規模なので、それが周辺に墓が見つからない理由と考えられます。年足の墓誌が江戸時代に見つかっていますが、仏教に熱心だった年足の墓は質素です。同様に教昊寺の僧も、塔が見える範

囲の中にひっそりと眠っていると思われます。

大化改新は大きな画期であり、その後に上淀廃寺が造られ、晩田山31号墳が作られますが、そこから米子平野の古代史が始まります。上淀廃寺や晩田山31号墳は、この地域の古代史の始まりの記念碑であり、調査研究は始まったばかりで、ますますの調査研究が必要だと思われます。